

隠語性

大学受験のために浪人していた頃、盲腸の手術で入院したことがある。そのとき同室におもしろい爺さんがいた。神田の長屋で生まれ育ったという自称江戸っ子で、起きていればほとんど一日中しゃべっていたが、飯どきになると「おう、千松か」という。そしてこっちが聞きもしないのに、なぜ「千松」なのかという理由を教えてくれた。

千松とはつまり、歌舞伎の「伽羅先代萩」に登場する乳母政岡の子である。ごぞんじ伊達騒動をモデルにした狂言だが、幼い若君が毒殺されるおそれがあるので、乳母みずからが飯炊きをする。その有名な場面で、若君に付き合って空腹をしのぶ千松が、「かか様、ままだまだかいの」という。それでおまんまのことを「千松」というのだそうだ。ようするに隠語である。

ために『日本国語大辞典』（小学館）で「千松」を引いてみると、「伽羅先代萩」の登場人物であることを説明したあとに、二番目の意味としてそれに由来する隠語がのっている。ただし、爺さんがいった意味とちょっと違う。

（「伽羅先代萩」の千松のせりふに「侍の子といふものは（略）お腹がするてもひもじうはない」

とあるところから)①空腹であること。また、その人。②囚人に対する減食処分をいう、盗人・てきや仲間の隠語。

なるほど同じ「千松」でも、別のせりふからまた隠語が生まれている。わたしが先の老人から教わった意味とあわせると、千松の名前はすくなくとも三通りの隠語として通用していたわけだ(どれもすでに死語だと思ふから過去形で書いておく)。

ところで俳句の言葉もまた、こうした隠語に共通する点がある。もっともわかりやすい例でいえば、まず季語のもっている意味が一般の人にはわからない。「花」といえば桜のことで、「月」は秋の月を意味するといった約束事は、俳句をつくる人たちの内部でしか通じないから、まさに隠語と同じである。

そもそも隠語とはなにか。これについても『日本国語大辞典』を引いてみる。

①仲間同士以外の人には意味を知らせない目的で、あるいはお互いが仲間同士であることを認めあう目的で使用する、特定の社会、範囲の中だけで通用することば。一般の語を特別の意味に用いたり(たとえば、強盗を「たたき」、新しく語を作ったり(たとえば刑事を「でか」)する。その発生系統は、香具師隠語、犯罪者隠語、遊里隠語にほばまとめられるが、近来、社会構造の複雑化から、隠語も多岐にわたって存在する。

じつに行き届いた説明である。「目的」が二通り述べられているが、たとえばデパートなどでも店員どうしが隠語を使う。某百貨店では、トイレに行くのを「仁休」、食事の場合は「有休」というらしい。これはお客にわからないようにするため、すなわち「仲間同士以外の人には意味を知らせない目的」である。

もう一つの「お互いが仲間同士であることを認めあう目的」のほうは、いわゆる通(つう)で使われる隠語にあてはまる。音大の学生やクラシックの愛好家は、ドヴォルザークの「チェロ協奏曲」をドボコンといい、モーツァルトの「レクイエム」をモツレクという。ウンリキといえはヴェルディの「運命の力」のことだ。先の「千松」も同じで、当初は歌舞伎通のあいだで使われたのだろう。

そして俳句の言葉は、さしずめ後者の「お互いが仲間同士であることを認めあう目的」にあてはまる。俳句の前身は俳諧連歌だが、そこで連句の付合(つけあひ)が成り立つには、連衆と呼ばれる「仲間」のあいだで言葉にたいする共通認識がなければならぬ。季の約束はその代表的なもので、最低でもこれを知らない連句の座には参加できない。

ちなみに「千松」と「飯」あるいは「空腹」という関係は、初期の俳諧における付合のパターンと同じもので、いわゆる物付けである。そして俳諧の付合は、そうした物付けから心付け(こみづけ)に変わっていった。なぜなら連衆たちは、知識だけの単純な付け方に飽き足りなくなって、そこに表現としての深みを求めるようになったからだ。そうした俳諧の表現史は、隠語が芸術化する過程といってもいい。

今日の俳句に、いうまでもなく連句の付合はない。けれども、いわゆる座の文芸としての本質が消滅したわけではない。俳句は依然として、「特定の社会、範囲の中だけで通用することば」が価値をもつ場所を前提としている。そうでなければ、五七五の十七音しかない言葉が、そもそも詩として成立するはずがない。

この意味において、俳句はけっして大衆文学ではない。かといって近代文学のように、なにか人生の大きなテーマを追求してみせる文学でもない。さしあたり「通の文学」とでも呼んでおこうか。かつて俳諧の座とは、いうならば通人たちの知的なサロンであった。そして今日の俳句もまた、そうした知的なサロンを前提にしている。このことはもっと強調されていい。

平成十四（二〇〇二）年の第十七回俳句研究賞で、その選考過程に興味深いことがあった。受賞作のへのんのんと雪積むやどり木のかたち」という句に「※のんのん」南部弁 いっしんに・ひたすらに」と注釈がついていて、このことが選考座談会で問題になったのである。選者たちは異口同音にこの注釈が不要であることを指摘し、黒田杏子が「もっと選者を信頼してよと言いたい」と発言している。つまりこの選考座談会は、俳句における知的なサロンの存在をあらためて認識させてくれたのである。

今日の俳句でも、句会という場合は座のアナロジーとして成立するし、その参加者を連衆に見立てることも可能だ。けれども、ここで俳句が「特定の社会、範囲」を前提としているという場合、とりわけ結社や句会のことを想定しているのではない。作品を総合誌に発表しても、さらにはそれを句集として上梓しても、その読者はつねに架空の知的なサロンを形成しているということだ。

ちなみに、句集は売れないといって嘆いてみせる人が、たまにいます。たぶんポーズであって、本当はもともと売れる気などないのだと思うが、もし本気で嘆いているのだとしたら、その人は俳句という文芸の意義がわかっていない。句集は売れるものではなく、送るものである。げんに俳人たちは、みんなそうしているではないか。

もちろん、送った以外にも句集が売れる俳人もいます。それは「特定の社会、範囲」で人気があるからで、ごく稀な例外を除けば、一般の（つまり俳句をつくらない）読者に売れるわけではない。もっとも最近では、小説も詩集もあまり売れないが、それは小説や詩に文芸としての魅力がなくなってきたからだ。しかし句集が一般の読者に売れないのは、文芸としての魅力がないからではない。その隠語性が不特定読者に通用しないからだ。

句集は売りたいくても売れないから、仕方なくただで送るのではない。読んでもらいたい人がいるから、その人に送りつけるのである。たとえば句会でも、点数がたくさん入るより、意中の人（多くの場合は主宰だろう）に採ってもらうほうが嬉しいのではないか。俳句とはつまり、自分から「仲間」を求める文芸なのである。

この文章は、俳句の言葉と隠語の類似性を証明することが目的ではないが、ひとつ具体的な例として、その隠語性がわかりやすい句を読んでみたい。

食欲の戻りてきたる子規忌かな

田中 裕明

一句をまず意味として読めば、子規の忌日に食欲が戻ってきたということだ。しかし俳句をつ

くらない一般の読者には、なぜそれが詩的な表現なのかわからない。ここでは「子規忌」が季語として一句の題であるが、一般の読者が理解しにくいのは、主題である「子規忌」に隠語性が強いからだ。

子規の忌日は九月十九日であり、俳句ではすなわち秋の季語になる。だから秋の季節感を想像しながら読めば、夏のあいだは喪失していた食欲がようやく戻ってきた感じが理解できる。まさに食欲の秋ということだが、それだけがいいのであれば、秋の季語はほかにもたくさんある。「子規忌」という季語が選ばれた理由は、そこに正岡子規のイメージが加わる効果が計算されているからだ。

読者はこの季語から、季節感とはべつに正岡子規その人を使い、「食欲」という言葉から、その随筆「仰臥漫録」で語られる彼の旺盛な食欲を思い浮かべることができる。つまりこの句は、読者が「仰臥漫録」を読んでいることを前提にしているのであって、もしそうでない読者がいれば、作者と読者のあいだの通路がひとつ減ることになる。

読者のなかには逆に、わかりすぎてつまらないという人もいるかもしれない。けれども俳句の表現は、なにも謎解きの難しさに価値があるわけではない。作者はある秋の日にと食欲が回復してきたのを感じ、と同時に、その日が子規の忌日であることに気づいた。そこであらためて、食いつん坊の子規がこの世を去ったのが、食欲の秋であることを発見したのである。そこから作者と読者とのあいだで、子規についての会話がはじまる。そのことに意義を認められなければ、俳句の存在意義もないというしかない。

わたしは確信をもっていうが、俳句はけっして大衆化しない。逆にいえば、大衆化してしまえば俳句の価値はなくなる。俳句をつくらない一般の人からみれば、四季おりおりの風景を探索したり、五七五という定型に言葉をあてはめたりすることは、じゅうぶんに風狂な行為なのである。日々の生活に忙しければ、そんなことにかまけている暇はないというのが生活の価値観だろう。

風狂であることは、生活の価値観には従わない。そして独自の価値観を主張するには、「特定の社会、範囲」が必要になる。先に隠語について辞書の説明を引いたが、そこにその発生系統として「香具師隠語、犯罪者隠語、遊里隠語」とある。なにも俳人が香具師や犯罪者と同類だという気はないが、その精神においてカタギでないことは確かだ。

現代の俳人の大部分は、いうまでもなく社会（普通の社会！）のなかでちゃんと職業をもってゐる。けれども俳句に関わるときは、風狂に遊ぶ別の存在に変身する。それはとりもなおさず、外部の社会では通用しない言葉の美学に価値を置くことだ。わたしたちはまずそのことを確認した上で、俳句における隠語性の今日的な意義をあらためて考えてみたいと思う。